

民家の可変性と持続性

一浮羽町田籠地区における民家の地域資源化に関する基礎的研究一

天満 類子

1. 研究の背景

山村地域の集落では、設備の導入などが進み、生活の近代化が著しいが、高齢化、過疎化といった問題が依然として非常に厳しいことにはかわりがない。そんな中、都市にはない農村の魅力を見出し、新たな地域の活力としていこうという動きがでてきている。こうした地域資源を模索する諸活動は、グリーンツーリズムといった観光資源として活用される場合が多く、全国でも多くの自治体が、集落景観や民家を地域資源として考えている。民家や集落を観光資源として活用する際には、その基礎的な調査が、今後の運営は元より存在意義を確かめる上でも大変重要と考えるが、実際は民俗学的研究が大半を占め、集落景観を考える上で重要となるフィジカルな事象を扱った基礎研究は十分ではなく、情報が乏しい地域がほとんどである。地域固有の魅力を見出すという地域資源化の本来の意図を考える上では、活用・運営の方針を画策する以前に、その場所に対応した学術的な研究が基本になるべきだと考える。

本研究で対象とする浮羽町は、以前から棚田を中心とした農業体験型の観光を実施し、積極的に地域資源の開発に取り組んでいる。茅葺民家が多数残存するこの山村地域では、近年は民家の地域資源化に関心が高まってきている。しかし一方で、この地域はもとより、九州本土での民家・集落研究は実績が浅く、明らかになっていない点が多いのが実情である。早急に調査し、地域の特色を明らかにすることが求められる。

2. 対象地の概要

浮羽町田籠地区は、福岡県南部にある耳納連山の奥深く、大分県境に位置している。筑後川の支流である隈上川に沿った6集落（馬場、小間坊、市ヶ瀬、日森園、中村、注連原）と

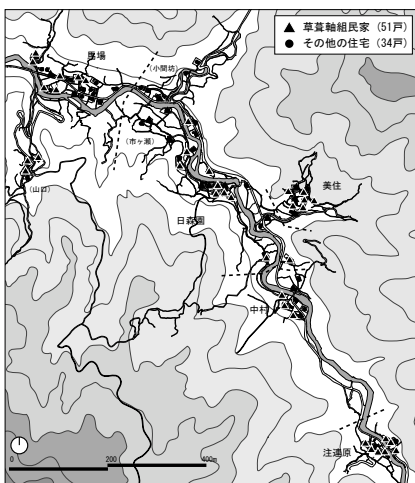


図1 浮羽町田籠地区

山肌に形成した2集落(山口, 美住)で構成されていたが、世帯数の減少により現在は山口が馬場に、小間坊、市ヶ瀬が日森園に入り、現在は5集落である。山肌に築かれた棚田を耕し、農業を主産業としてきたが、副業として林業が明治より盛んであった。地区の7割以上が山林でそのほとんどは人工林である。林業が盛況だった昭和40年頃は、山主、出し方、馬車引きといった、農業以外を主な家計とする家も多数あったという。明治維新後に増加した世帯数は、大正初めには140戸までに達し、以後1965年までは戸数を維持していたが、その後急減し現在は70世帯程度にとどまり、さらに減少傾向にある(図2)。

3. 宅地の変遷よりみる集落の柔軟性

3.1 現在の民家の残存状況

対象地には85戸の民家があり、そのうち茅葺などの草葺はわずか6戸しかないが、トタン被せ、ツウガエ¹⁾といった草葺の軸組を継承する民家は51戸と、全体の6割以上に達し、古い架構を持つ民家がかかり多く残っていると見える(図1)。それらの創建年代を見ると(図2)、明治以前のものが多いが、大正になって瓦葺が建てられ始めてからも戦前までは、半数が草葺で建て続けられた。

3.2 集落景観のダイナミズム

現存する民家の地目の変遷を辿ると、明治初期から常に宅地だったものは45筆にとどまり、全体の約半数が新しい宅地であった。さらに消滅した宅地を調査すると、現存の筆数とほぼ同じ106筆存在し、一度宅地になっても農地に戻るケースが高い割合で起こっている。つまり一度宅地になったからといってそれ以降固定的な宅地として受け継がれるとは限らず、この地域の住宅の立地はかなり流動的だといえる(図3)。住宅を構える都度に宅地

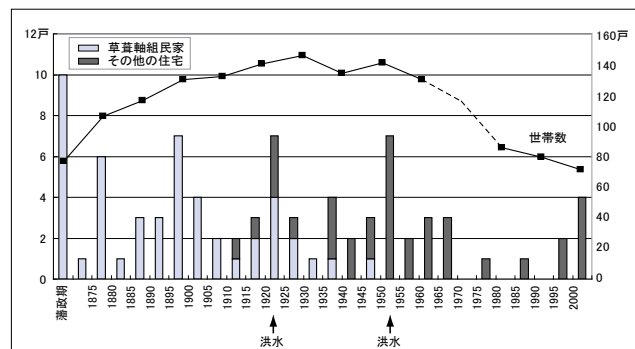


図2 現存民家の創建年代と世帯数

が選定されている状況が予想される。

3.3 移住と住替え

そのような宅地の流動性がどのようなプロセスで起こっているかを明らかにするため、居住者に対して移住歴の調査を行った。その結果、分家や転居をする場合、新たに家を新築したもの(新築)が21例だったのに対し、既存の民家に移り住んだもの(住替)は27例とむしろ多かった。これらをさらに移住が行われる範囲で傾向を分析すると、集落内に分家する場合は新築する傾向があり、地区外から転居する場合は既存の民家に住み替える傾向が強く現れた(表1)。しかしさらに注目すべきは、田箆地区内で移住する場合は、分家・転居に関係なく住替が頻繁に起こっていることである。また、集落内に分家するケースは明治以前、地区外から既存民家に転居・住替するケースは1965年以降という時代的な傾向があるのに対し、田箆地区内での住替えは古くから継続して行われていることが分かった(表2)。

また、住替・新築とは別に(移築)という移住形式も7例確認された。地区外から、あるいは地区外へ移築する場合は、以前の居住者ではない第三者に民家が売却されているが、地区内で移築する場合は居住者と一緒に移動している。移築も1899年から1970年まで継続して確認された。

3.4 居住者の変動と宅地の流動性

これら民家の住替例と移築例を空間的に表したものが図3である。分家は限定的な場所では本家を中心として発散するように起こっているのに対し、住替は方向性がなく、またかなり広い範囲で起こっている。また、地目の履歴に注目すると、たとえ宅地や民家が明治以前からの古いものであっても、関係なく住替が起こっているのがわかる。図4は以上の移住例をモデル的に示したものである。横軸は民家の存続と移動を示すが、ひとつの民家で移住や移築が繰り返し起こっているのがわかる。また家系の変

動に注目すると、分家時に新築した民家に、違う家系が分家し住替する例、本家が家を分けた後に地区外へ転居し空屋になった民家に他の家系が分家する例、また本家を第三者に売り移築する例など多様であり、規則性が存在しているわけではない。本家や分家でもってイエを守り継いでいくという一般的な土地や民家の継承性は薄く、むしろここでは自由な宅地、あるいは居住形式が選択できる柔軟さがあると考えられる。このような自由な選択、あるいはそれを許すフレキシビリティが、結果的には集落景観をダイナミックに改変するような動機となっている。

4. 民家の空間的可変性

4.1 間取りの復原と室の特徴

田箆・新川地区²⁾のうち民家24事例について実測調査を行った。図5はそれらの遺構と住民に対するヒアリン

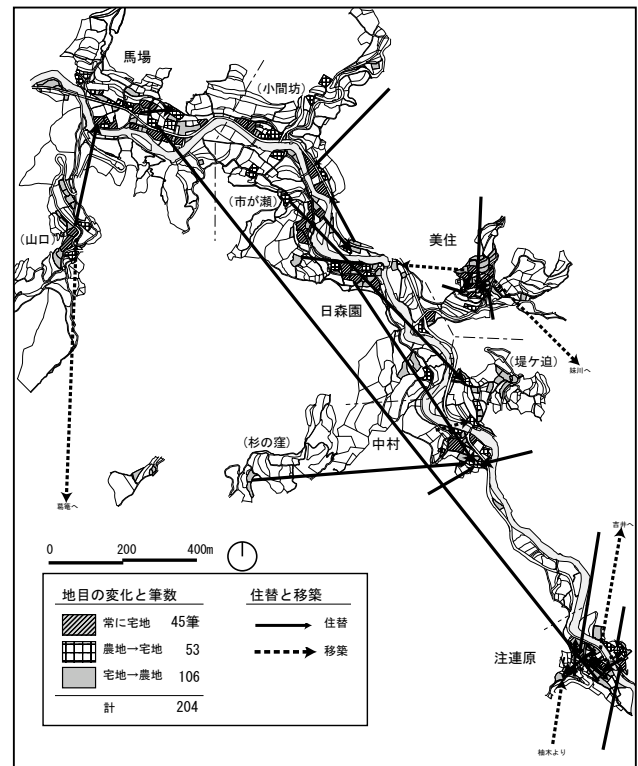


図3 地区内の住替と地目の変化

表1 移住の形式と移動範囲

	集落内	地区内	地区外	計
分家・新築	12	5		21
転居・新築	1	3		
分家・住替	4	4	1	27
転居・住替	4	3	11	
転居・移築	2	1		7
地区外に移築			4	
計	23	16	16	55

表2 移住の発生年代

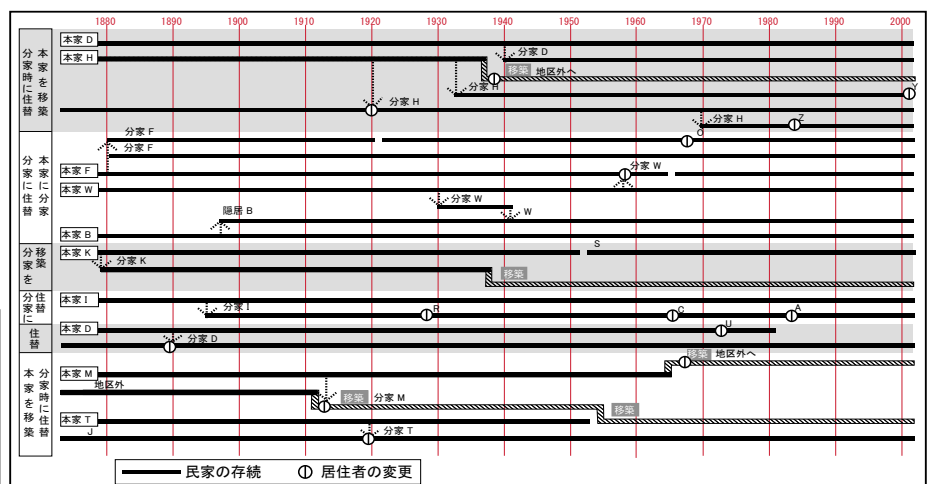
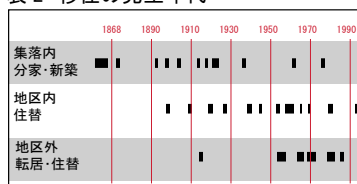


図4 移住モデル

グより建築当時の平面を復原し、類型化したものである。一般的に田の字型が多いとみられていた本対象地であっても、定着するのはむしろ昭和に入ってからであることが分かり、それ以前は様々な間取りがあることが明らかになった。しかしこのような多彩な平面であっても、表3に示すようなゴゼン・ザシキ・ナカエ(ダイドコロ)・ナンド・ドマという空間の種類やそれらの機能、室土士のつながりには強い共通点が見られる。一方で間取りにはきまった型や変遷がはっきりしないことから、ここの間取りは家全体からみたときの分配で決まるのではなく、単純に室の組み合わせと空間のつながりによって決まっているといえる。

表3 室の特徴

<p>ゴゼン 客を出迎える空間で、一般的な接客が行われる。行事の際はザシキと一体的に使われる場合がある。大きな神棚、差鴨居、高い丸竹天井、塗りの板戸、サマンコ窓、と座敷とは異なるが意匠性の高い空間である。6~12.5帖と広にばらつきがある。</p>
<p>ザシキ ほぼすべて6~8帖の広さで安定している。竿縁天井であるが、長押しは後で付けられた場合が多い。ブツマがない場合は、ゴゼン正面のトコの隣に仏壇を据える。長押しをもつようなザシキには1間の平書院や付け書院がつくが、そうでなくとも半間の平書院がつく場合が多い。</p>
<p>ナカエ ダイドコロとも言い、食事や親しい人を接客する空間である。もともとはドマとの境界に建具はなく、炊事場と連続的な使われ方をしていた。</p>
<p>ナンド 閉鎖的な部屋で、寝間とも呼ばれる。天井がなく小屋裏まで筒抜けの場合もあるが、根太天井を渡し、物置として中2階を作っている事例もある。</p>
<p>ドマ ノワとも呼ばれ、手前には根太天井を渡して中2階を物置として使い、天井のない奥はクドを置き、炊事場として使っていた。ナカエから直接炊事できるゴゼンクドを置く場合もある。</p>

4.2 増改築・改装による空間の改変とその特徴

現在の状況と復原の間取りを比較すると、かなりの部分で、また相当な規模で手が加えられている(図6)。こうした空間の改変は、民家の間取りが時代的な変遷でもって空間を獲得していくという以上に、複雑な平面改変の可能性を含み、民家が変わってゆくプロセスを明らかにする上で鍵となると考える。

実測調査を行った民家の改変部分を分析すると、そのすべての民家で何らかの改変が行われており、約60種212箇所の改変行為が確認された。

もっとも改変が激しい部位はドマ(28例)で、壁で空間を仕切り内風呂、部屋、炊事場、玄関を設けたり、中2階の物置を部屋やザシキに改造している。炊事空間はもとからドマにあったが、1940年頃から煙突付きのカマドが普及すると、下屋が増築されてそこに移り(10例)、ナカエから切り離され、クドから煙を直接屋根裏に通すこともなくなった。さらに1970年頃から近代的なキッチンが導入されるとドマが床土上化され、境界に建具が設けられた。新しい空間には一般的にダイニングテーブルがおかれるが、食事はそれまで通りナカエ(イマ)で行う家が多いようである。

戦前はゴゼンで養蚕が行われたため、炉を切って暖をとり丸竹天井の下に竿縁天井を設けて熱効率を上げた(13

<一列型>	<二室型>	<横食い違い型>	<縦食い違い型>	<田の字型>	<その他>
<p>I (1)</p> <p>()は事例数 ゴ ゴゼン, オモテ ザ ザシキ ブ ブツマ ナ ナンド, ネマ ダ ナカエ, ダイドコロ</p>	<p>II (3)</p>	<p>III (3)</p> <p>III' (1)</p>	<p>IV (2)</p> <p>IV' (1)</p>	<p>V (9)</p> <p>V' (1)</p>	<p>VI (1)</p> <p>VI (1)</p>
<p>ゴゼンとザシキのみ。</p>	<p>神棚・仏壇を備えたザシキと食事・睡眠をするナンドがドマに面する。</p>	<p>手前のザシキとゴゼンが奥のナンドとダイドコロとずれる。ダイドコロの上がり口に建具がない。</p>	<p>ザシキの列の手前と後ろの間に壁がない。ドマに板縁が飛び出ている。</p>	<p>室が食い違わない。ダイドコロがドマと続いているものと続いているものがある。</p>	<p>鉤屋</p>
<p>桁×梁</p>	<p>4~4.5×3.5</p>	<p>6~7.5×4</p>	<p>6.5~8×4~4.5</p>	<p>5.5~7×3.5</p>	

図5 間取りの復原と類型



図6 現在の間取りと増築部分

例)。また、明治前後から林業が盛んになり、文机を置いて勘定などの書き物をする空間としてカンジョウマがゴゼンの外側に作られた(11例)。現在は子どもの勉強部屋、仕事部屋、化粧部屋、押入等になっている。さらに、ドマとの境界に以前からの建具を利用した押入がドマに突き出して付加される場合があり(9例)、中には一面押入を付加することによって、ドマとの往來を完全に断ち切ったものもある。ゴゼンもまた機能的な理由で大幅に改変されやすいといえる。一方で、ナンド・ナカエは裏方向や座敷方向に半間程度の下屋を出し、部屋を拡張する傾向がある(17)。また、ナンドを分割して2部屋にしたり、下屋を出して部屋を増築している例もある。

4.3 改変の種類から見る民家の変容モデル

以上のような改変行為を、表4のように建築的な操作で分類し、民家との関係を時系列で示す(図7)。点線は

表4 改変事例

類型	数	例
a:境界の変更	a (21)	建具・間仕切りの設置, 境界の移動, 部屋の分化
	ae (15)	ドマを仕切り部屋の増築
	af (20)	室の境界に押入を設置, ドマを仕切り玄関・風呂・便所・炊事場の設置
	56	
b:空間の拡張	b (6)	下屋増築によるナカエ・ナンドの拡張
	bf (14)	下炊事場の拡張, 風呂・廊下の拡張
	20	
c:室の増築	c (16)	2階部屋・応接間・ナンドなどの室の増築
	cf (59)	カンジョウマ・ザシキベンジョ・風呂・炊事場・縁・玄関の増築
	75	
d:離れの追加	15	隠居屋の増築, 付属屋に部屋を設置
e:内装の改変	e (28)	天井の張替え・新設, 出窓・掃き出しマドの設置, 座敷内装の改変
	ef (4)	ドマの床上げ, 廊下の改裝
	32	
f:設備の導入	14	囲炉裏の設置・廃止, 便所・風呂の改善
合計	212	

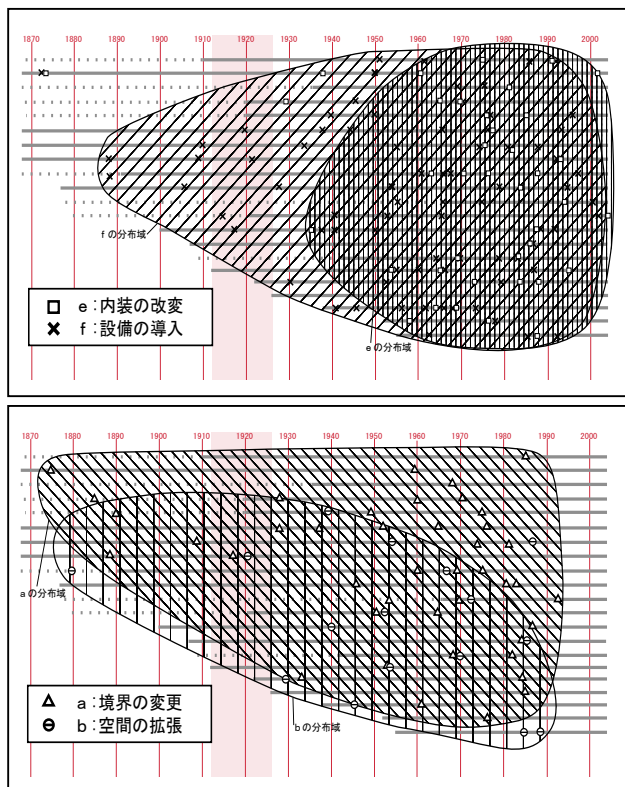


図7 改変事例の変遷

民家の存続を、実線は現在の家系の居住歴を示し、民家の創建順に上から並べている。これらによると、まず改変行為が近世から現代まで継続して起こっていることが注目される。さらにひとつの民家で注目すると、e, fの設備、内装の改変行為は繰り返し起こるが、6時代で波があるのに対し、b, cの床面積を広げる行為は一定の期間を経て繰り返す傾向がある。

また特徴的なものを挙げると、eの(内装の改変)は、民家の古さに関係なく1960年以降に頻発し、現在も続いており、fの(設備の導入)もまた、近世以降に発生し現在まで連続して行われている。一方でaの(境界の改変)は、fと同様に民家が存続する限り近世から継続してさかんに起こっていたが、1985年を境に途絶えている。さらにbの(空間の拡張)は、比較的新しい民家で起こりやすいという特徴が別にあるが、aと同様に継続していた傾向が、1990年を境に終息している。この結果は、設備や内装といった機能や付加価値がはっきりしているものに対して手を加える行為は現在まで続いており、また同じ機能を持つものでも繰り返し改善が行われ続けていること示す。一方で、部屋の拡張や縮小、あるいは部屋と部屋との境界を、開閉や移動によりつながりを操作し空間自体をダイナミックに改変させるといった行為は、近世から継続して起こっていたことが明らかになったが、この20年でなくなっていることが注目される。このように、微妙な増改築を何回も繰り返しながら空間が少しずつ改変され、しかも継続して変化し続けた結果、現在の民家があるといえる。現在の姿を一見すると、四つ間取りが基本構成であるかのように見えるこれらの民家も、そのプロセスは実に多様であることが明らかになった。

5. まとめ

以上の分析によって、この地域の民家は、住替が頻繁に、しかも継続的に起こっており、それらは家系に関係なく自由に発生するため、地区の広範囲で居住者の入れ替えが起こっていることが明らかになった。さらに、そうして住み始められた民家は、様々な手法で手を加えられ、変化し続けることがわかった。このように、この地域の民家は居住地として選択される時、さらに住みながらも、居住者の都合に合わせてフレキシブルに対応しているといえる。そのような融通性が多種多様な民家形態を生み出してきたひとつの要因といえるが、また民家が居住者に対して柔軟に対応してきたからこそ、現在まで維持されてきたといえる。一方で、こうした柔軟性に価値を置かなくなった現代においては、ここで維持されてきたような仕組みは有効に活用されず見過ごされつつある。

- 1) 軸部を変えず小屋組だけを組み替え瓦に葺き替える構法
- 2) 隣接する新川地区は昨年の調査により同様の傾向が明らかになっている。